



空耳からの見解けんげと科学の使命

元大学講師

花村秀樹

空耳とは

空耳とは、声や音が生じていないのにフツと、音が聞こえたような気がすることで、実際にそんな声や音がしたわけではないのに、とにかく、何かを感じることである。ところで、人間には、顕在意識と潜在意識があると考えられている。顕在意識は脳の身体的な作用であるが、潜在意識のほうは視覚でとらえられず人体のどこに位置しているのか明確でないことから、究明してゆくのには深遠で高いハードルがたちはだかる。ここでとり

あげる空耳は、潜在意識で究明すべきものなのであろうか……。しかし、そんなことはありえないと、この見えない不思議な世界のことを、超常現象を、かなり懐疑的にとらえて否定する意見すらある。

交通事故の予知とイチヨウとの対話

私は、これまでいくつかの空耳を体験した。とりわけ、私にとって深刻な交通事故を予知してくれたものと、イチヨウの木との不思議な対話を、古い記憶や記録

から、時の経過で積もり積もった埃をとりはらい、そのまま切り取ってありのままにお話します。

事故の遭遇

今から40年前の35歳の頃、長年かけ貯金してやっと買えたフォルクス・ワーゲン（カブトムシと呼ばれた）の一番安い車に乗っていた。黄色のワーゲンだ。その頃のワーゲンのハンドルはやや大径で硬い樹脂製だった。ところが、運転していると「衝突すると危ないよ」という警告のようなものが幾度か聞こえたような気がした。これは何だろう、その時は深く受け止めていなかった。事故に遭遇した2月26日、その日、囑託していた会社で会議があり早めに出掛けなければならなかった。それなのに何故か、心のブレーキがかかったようにグズグズしてなかなか遅れて出かけた。走り出そうとした時、「シート・ベルト締めなよ」と、聞こえたような気がした。しかし、私はこれを軽視した。当時、シート・ベルトは罰則化されていなかった。それに、ハンドルと体との間隔

を比較的離して運転していたので、衝突しても大丈夫だと、高をくくっていた、まことに不甲斐ないことに。

町田の団地を出て3、40分して稲城市百村にさしかかり片側一車線の緩い右まわりの道を走っていると反対方向から車線を越えて猛スピードで灰色の車が蛇行・暴走してきた。車高を極端に落したシャコタンと呼ばれた改造車だ。咄嗟に、その車を避けようと道幅が狭いが左へ寄れるだけ寄ったが衝突された。その瞬間、かねて警告をうけていたハンドルは、衝突した激烈な衝撃ではねかえり顔を激しくえぐった。その直後、痛みは感じなかったが、左の鼻根から右頬にかけて止めどなく出血した。私はその出血を抑えようと車から這い出て道路に仰向けに寝た。そして、傍にいた人に「救急車を」と頼んだ。

救急車へ運ばれ、救急隊員の応急救置をうけながらサイレンの音がまるで他人事のように聞こえたのを憶えている。隊員はこれから向かう病院と連絡をとっていたが、その隊員へ、ハンドルで頭部を強打し脳をやられて

いるかもしれませんが、脳外科のある病院へお願いしますと頼んだ。隊員はもともと了解して、向かっている病院を変え別の病院に連絡をとってくれ、事故現場から離れているが脳外科のある病院へ搬送してくれた。

応急手当と検査を終えて、私は中年のがつしりした体格の担当医に尋ねた。「大丈夫だよ、脳に問題はないよ」。それから、激しい痛みをともなった全身打撲で寝たつきり、意のままに身動きができなかった。

事故当日、エンジン・オイルを交換するため１リットル入りのブリキ缶を四つバッグに入れて左の助手席に置いていたが、事故後、グニャグニャに振じれ変形したオイル缶を見て、改めて、事故の衝撃の凄さを知った。

フォルクス・ワーゲンのエンジンは後ろにあり、前のボンネットを開けると真中に15インチのスペアー・タイヤが大きなボルトで水平に装着されていた。そのタイヤには、取扱説明書でウインドー・ワッシャー用に規定以上の空気を入れるように指示していた。私は指示通りに余分に空気を入れていた。ボンネット中央に水平におか

れたタイヤとその余分な空気とが、激しい衝撃を吸収してくれたのだった。それに、今の車では考えられない分厚い鋼板が。この設計でなかったら・・・思い出すと恐ろしくなる。

ここではつきり断っておくが、ワーゲン車のハンドルに欠陥があつたのではない。あれ程、激しく衝突されれば、どの車のハンドルもおなじ物理的な反応をする。その点、誤解しないで欲しい。それより、事故を考慮した優れた設計だった。

不安な顔の傷

とにかく、私は自分の顔がどんなになっているのか不安だった。けれど、なかなか家族は手鏡を渡してくれない。親しくなったナースに尋ねた。彼女はナース仲間の話を、申し訳なさそうに話してくれた。「あなたは、デストロイヤーと呼ばれてるのよ」。

鼻根部から右頬にかけてハンドルでえぐられた傷は凄まじく腫れあがり縫合した長い糸幅でなかなか抜糸でき

なかった。

それから漸くして自分の惨たらしい顔を見た。顔を見て恐れや悲しみの感情はおこらなかった。それより、入院中、顔がどこまで復元できるのか、顔の回復手術を自分なりにあれこれ悩み考えた。

警察病院

そこで、高校生の頃、試験管洗い等、雑役のアルバイトをした警察病院を思い出した。当時、飯田橋にあった警察病院の形成外科は高い評価をされていた。

アルバイトしていた縁をたどり、優れた腕をもつベテランのドクターを紹介していただいた。そこで、ほぼ半年の間隔をおいて3回手術、結果として2年以上かかった。

その老練なドクターはおう揚で包容力のある人柄でどれだけ落ち着きを得られたことか。「その救急車で、遠いけどここまで搬送してもらえば糸で縫合しない特殊な傷の治療ができたんだ。初期の処置が大切なんだ。だ

けど安心しな、元の顔にもどしてやるから」。

それとともに、入院した初めの頃から、あの音なき声は何だったのか、思い出しては考え、思い出しては考え、何度も何度も反芻した。

気付いた空耳

入院中は、時間がたつぷりあり、本を濫読した。ところが、漫然と文字をおっていて、肩をたたかれるような文章に出遭った。山本周五郎の『ながい坂』のおわりの部分だ。「これまでどれほど多く、人や大事なものに気づかず、みすごしてきたかもしれないし、これからも気づかれずに聞きのがしたり、見のがしたりすることがいかに多いかも判らない^A」。そこで、ハッと、気づいた。「大事な物に気づかなかった！」あれは、空耳そのものだったんだ！ 事故から半月位、経って、自分というかなり鈍感なグロー・ランプが作動したことに。